

時事評論  
現代を  
読む

森本あんり

# 一夫多妻婚の問いかけ

## ——モルモン教とイスラム

もりもと・あんり  
1956年生まれ。  
国際基督教大学  
東京神学大学、ブ  
リンストン神学大  
学(BPU)卒業。  
国際基督教大学教  
授。



### モルモン教原理主義の町

GTU（連合神学大学院）の授業  
が終わり、成績もつけ終わったの  
で、1週間ほどの旅に出た。グラ  
ンド・キャニオンからアンテロー  
プ・キャニオンとモニュメント・  
ヴァレーへ、そしてナチュラル・  
ブリッジズへと回り、西部の自然  
を大いに堪能することができた。

その帰り道、ふと道路脇の標識  
が目にとまった。「コロラド・シ  
ティ」とある。その瞬間、わたし  
は、毎年授業で学生に見せている  
ドキュメンタリーを思い出した。  
アメリカの公共放送局PBSが製  
作した一夫多妻制をめぐる映像記  
録であるが、そこに登場するのが  
まさにこの町なのである。ここは、  
モルモン教のファンダメンタリス  
トが1980年代に作った町であ  
る。モルモン教の本体は19世紀末  
に一夫多妻の教義を放棄し、アメ  
リカ社会の主流に迎え入れられた

が、この一派はそれを墮落と考え、  
真のモルモン教と真のキリスト教  
を掲げて一夫多妻制を続けている  
のである。

小さなその町へ赤茶けた道を  
入ってゆくと、すぐに3人の若い  
女性に出会った。色は違うが、み  
な同じ型の服を着ている。その後、  
会う人会う人、女性は小さな女の  
子に至るまでみなこの同じ服であ  
る。町唯一のスーパーマーケット  
でも、出入りするののみな同じ服  
を着た女性で、しかも白人だけ。  
それだけですでに異様な光景であ  
る。

わたしはヴィデオを思い出しな  
がら町の教会を探し当てようとす  
したが、見つからない。ただひとつ  
あったのは、いかにも集会所らし  
き大きなのに、何の看板もなく、  
「不審者警戒中」「関係者以外立入  
厳禁」という威嚇標識だけが目立  
つ建物である。考えてみると、彼  
らにとって教会とは、自分たちが

自分たちの様式に従って集まると  
ころで、新しい人を招く必要はな  
いのだから、これで十分なのであ  
る。とりわけ昨今は、脱出者によ  
る訴訟や少女性虐待などでマスコ  
ミの批判にさらされているためか、  
町はいっそう警戒心が強い。

ゆっくり車を走らせていると、  
バックミラーに黒い窓ガラスの  
ピックアップが映った。それが何  
度道を曲がっても執拗に後をつい  
てくるのである。よそ者はすぐに  
わかるらしい。まして東洋人観光  
客の闖入など、彼らが喜ぶはずも  
ない。町ぐるみの隠蔽された暴力  
の報道を思い起こし、戦慄を覚え  
て早々に町を後にした。

### 他宗教を尊重するとは

授業でよく語ることだが、彼ら  
にも彼らなりの言い分がある。旧  
約聖書にも実例が出ていたのではな  
いか。家事を共同で行えば妻たち  
も楽だし、そもそも一夫一婦制

だって陰では不倫関係ばかりだ、  
云々。だが同時に、一夫多妻制は  
それ自体の問題だけでなく、近親  
相姦や性暴力、抑圧や扶養放棄な  
ど、そこから派生する問題も大き  
い。何よりも、男女の明らかな不  
平等は説明しがたい。

実は、これはアメリカやキリ  
スト教だけに限った問題ではない。  
世界にはムスリム人口が増大して  
いる。一夫多妻を実践するイスラ  
ム教徒はごく少数であるとしても、  
それは将来的にも改められる余地  
のない不動の教義である。多くの  
ムスリム人口を抱えた国では、結  
婚などの私的な分野においては宗  
教法が適用される。つまり、本人  
の信ずる宗教により、適用される  
法律が異なるわけである。多文化  
国家のアメリカも数十年後にはそ  
うなるだろう、と見る研究者もあ  
るが、はたして日本はどうだろうか。  
他宗教をあるがままに尊重する  
ことは、口で言うほどたやすくはない。